日本漢音声調の必要性の低化について

――院政期と鎌倉期の『大慈恩寺三蔵法師伝』訓読資料を比較して――

佐々木　勇

一、本稿の目的

日本漢字音の声調のうち、漢音声調の初期の実態は、ほぼ明らかにされている。[1]

これまでの研究によれば、伝来以来、中国原音の声調を正確に伝え、維持しようとしたと考えられる。そして、これがいつまで維持されるのかも、限られた資料については、判明している。

字音直読資料『蒙求』では、十六世紀はじめに、声調の伝承が困難になっている。しかし、その時までは、声調を示すための声点が、比較的よく加点されている。[2]

この十六世紀はじめの実態を詳しく知るため、清原宣賢の加点資料を調査したことがある。結果は、声点を加点する資料は例外的で、経書に限られていた。[3]

このことから、『蒙求』は、字音直読という資料の性格から、比較的遅くまで伝承漢音声調が維持されたものであることが知られた。十六世紀前半という時期においては、伝承漢音声調を必要とする文献は、限られていた。

したがって、時代を遡れば、漢音読中心資料において、声調の必要性が低くなる様を観察できるはずである。

本稿では、声点加点数から、漢音声調の必要性低下の様相を探ることを、目的とする。

二、方法と資料

声調の「必要性」を、文献によって知ることは困難である。しかし、平安時代の字音直読資料ではほとんどの漢字に声点が加点されていたが、現代ではそのようなことはないことから、漢音声調を学習する必要があったから、平安時代には声点が加点されていたと考えられる。そして、その加点が無くなったことは、漢音声調維持の必要が無くなったことを示すと解釈できる。よって、声点の多寡によって、声調の必要度を測ることが、ある程度可能

であろう。

実際には、同一本文に時代を隔てて加点された訓点同士を比較し、声点数の差を見るという方法が有効であろう。声点加点が、反切・仮名などの加点に比して、著しく少なくなっていれば、声調の必要性が無くなったと考えてもよいと思われるからである。したがって、声点ばかりでなく、反切・仮名音注も同時に、数の比較を行なう必要がある。

本稿では、比較的早い時期の実態を見る目的から、平安後期・院政期と鎌倉時代加点本とを比較してみる。

対象の時代を比較的早期に定めれば、比較する文献は、伝承漢音声調がいちはやく必要性を無くすことが予測される文献がふさわしい。

伝承漢音声調の必要が薄れるのは、日本語文脈中の漢語からであろう。しかしながら、いわゆる漢字仮名交じり文の漢語には、声点が加点されることは希である。

よって、漢文訓読資料を対象とする。また、訓点の粗密は、文献によって異なるので、比較的よく加点されている文献同士を比べる。

右のような目的と方法とから、比較に耐えうる現存資料は、絞られる。

今回は、漢音資料として利用されることが多い『大慈恩寺三蔵法師伝』の訓点本を取り上げる。中でも、右の条件を満たすものとして、興福寺蔵本と京都大学人文科学研究所蔵本とを、比較の資料として、選ぶ。[4]

三、対象資料の訓点

興福寺本には、数種の訓点が存することが明らかにされている。いま、築島裕の研究に依って、記す。[5]

A種点――一〇八〇年頃加点の朱点。巻第一前半（一三六行目途中まで）に加点されている。

B種点――A種点と同筆で、直後に加点された墨点。A種点と同じ部分に加点され、異訓を示すことが目的であったと考えられる。

C種点――一〇九九年加点の墨点。巻第七から巻第十の全体に加点されている。

D種点――C種点の直後に加点された朱点。C種点と同じ部分に加点され、異訓を示すことが目的であったと考えられる。

E種点――一一一六年加点の墨点。A種点と祖点を等しくするか。A種点に続けて巻第一後半（一三六行目途中から巻末まで）から巻第六巻尾までに加点されている。

F種点――一一七〇年加点の墨点。巻第一・第二に希に加点されている。

一方の京都大学人文科学研究所蔵本には、全巻に墨点が存し、巻六～巻十までには朱点も加点されている。

この京都大学人文科学研究所蔵本には、最終巻（巻第十）に、次の奥書が存する。

承元四年（一二一〇）卯月十五日書写并移點畢

（追筆）「同年六月十三日一交了」

（別筆）「貞應二年（一二二三）之長講會講師弁淵得業西域傳慈恩傳共讀之」

訓点は、墨点と朱点との二種がある。墨点は、朱点を補った箇所があるため、後のものと判断される。よって、承元四年（一二一〇）に本文書写と同時に朱点が加点され、貞應二年（一二二三）に弁淵によって墨点が加点されたものであろう。僧弁淵は、建保三年（一二一五）に維摩会の竪義を務めた得業であった。本資料に使用されているヲコト点も、喜多院点（法相宗所用）である。[6]

したがって、両資料は、ともに興福寺において、時代を隔てて加点されたものである。

四、本稿で行なう訓点の比較

本稿の目的から、ある程度の声点加点数が必要である。

そこで、興福寺本では、A種点・C種点・E種点を取り上げる。また、京都大学人文科学研究所本では、全巻に加点されている一二二三年の墨点を対象とする。

あらためて、巻ごとに、各点加点の実態を整理すると、次表のとおりである。

（「前半」「後半」は、それぞれ前半・後半のみ加点。○は、全巻加点。△は、全巻加点なれども加点粗。）

点種	加点年	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	巻九	巻十
①興福寺本A種点	一〇八〇年頃点	前半									
②興福寺本C種点	一〇九九年点							○	○	○	○
③興福寺本E種点	一一一六年点	後半	○	○	○	○	○				
④人文研本　墨点	一二二三年点	○	○	△	△	△	○	○	○	○	○

同一本文で比較する方法を採るため、本稿で行なうのは、以下の比較となる。

1．①興福寺本A種点（一〇八〇年頃点）と④人文科学研究所蔵本一二二三年点

2・②興福寺本C種点（一〇九九年点）と④人文科学研究所蔵本一二二三年点

3・③興福寺本E種点（一一一六年点）と④人文科学研究所蔵本一二二三年点

五、比較結果

1・①興福寺本一〇八〇年頃点と④人文科学研究所蔵本一二二三年点との比較

はじめに、両点の加点の様子を示すと、次の如くである。巻第一序文本文冒頭から、両点に音注の存する部分を掲げる。（用例下の（　）内は所在。漢数字は巻数、算用数字は行数。以下同。）

①垂(平)拱(平)四年二月十五日に仰(上)止(上)沙門釈(ノ)彦(去)悰(上)の述　（一1）

④垂(クヰヨウ)拱(クキヨウ)四年二月十五日(ニ)仰(キヤウ)止(シ)ノ沙門釈(ノ)彦悰(ノ)述　（一2）

①三宝ヲ啓イテ[以]群(平)邪(平)(ノ)[之]典(上)を黜(シリソ)ケたり。　（一2）

④三宝ヲ啓(キ)テ[以]群―邪(シヤ)(ノ)[之]典を黜(シリソ)ク。　（一3）

①之を大法と謂フ、言フコ、ロハ真荃(上)ナリ[也]、化城。垢(平)服。済(サイ平)馬。馳(去)羊(上)。之を小学と謂(フ)、言(イ)フコ、ロハ権(去)旨(上)ナリ[也]。　（一3）

④之ヲ大法(ト)謂(フ)、言(イ)フコ、ロハ真(平軽)荃(セム平軽)ナリ[也]、化城。垢服。済(サイ)―馬ハ馳(メチ)―羊(ヤウ)。之ヲ小学(ト)謂(フ)、言(フコ、ロ)ハ権(クヱン)(去)旨(上)(ナリ)[也]。　（一4）

右の数例からも、①点に存した声点が④点には無く、④点に存する仮名音注が①点には無いことなど、両点の相違の一端が知られる。

右のような本文から、両点の字音注を抜き出した。その字音注の数は、次の如くである。(7)

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
①一〇八〇年頃点	八（反切無し）	二七四	八三九	一一二一
④一二二三年点	六（反切二例）	一八七	二二二	四一五

字音注の総数において、④は①の三七・〇％（小数第二位で四捨五入。以下同。）でしかない。④は、音注の密度が低い。

つぎに、音注の種別に、比較してみる。

反切・同音字注は、両点ともに少ない。これは、『大慈恩寺三蔵法師伝』の漢字の音読に、辞書・音義が用いられなかったことを示すものであろう。

仮名音注は、④は①の六八・二％である。

これに対し、④の声点は、①の二六・五％でしかない。④点の他の音注に比べて、声点は少ない。

右の比較では、①点と④点との音注の総数に大きな差があった。そこで、①④点ともに字音点（反切・同音字注、仮名音注、声点のいずれか）が加点されている漢字に限り、再度比較してみる。

すると、次のようになる。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
①一〇八〇年頃点	六（反切無し）	一四九	三〇三	四五八
④一二二三年点	五（反切二例）	一八一	二一九	四〇五

今度は、仮名音注は、④点の方が多い。一方、声点は、④点の方が、やはり少ない。よって、加点の新しい④は、①に比して、声点が少ないといえる。

2・②興福寺本一〇九九年点と④人文科学研究所蔵本一二二三年点との比較

同一本文で比較できる訓点として、次に、興福寺本一〇九九年点（C点）と④人文科学研究所蔵本一二二三年点とを比較してみる。調査は、巻第七について行なう。

右と同一の項目を調査する。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
②一〇九九年点	二七（反切無し）	二九二	一四八三	一八〇二
④一二二三年点	六（反切二例）	二六三	七九三	一〇六二

ここでも、①点と④点とを比較したときと、同様なことが言える。

すなわち、②点に比して、④点は、字音注が粗である。しかしながら、仮名音注の数の差は比較的少ない。これに対して、④点の声点は、②点の半数程度でしかない。(8)

先と同様に、②④点ともに字音点が加点されている漢字に限ると、次のようになる。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
②一〇九九年点	四（反切無し）	一九八	六九三	八九五
④一二二三年点	二（反切無し）	一九九	六三四	八三五

仮名音注は、ほぼ同数である。しかし、声点は④点に少ない。

3・③興福寺本一一一六年点と④人文科学研究所蔵本一二二三年点との比較

同様に、③点と④点との比較を行なう。巻一後半と巻二について、比較する。

③一一一六年点　二一（反切三例）　一五四　五一七　六九二
④一二二三年点　六（反切五例）　四三九　五八四　一〇二九

右の通りである。このたびは、④点の方が、③点と比べて、字音注が密である。

ここでも、③④ともに字音点が加点されている漢字に限ると、次のようになる。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
③一一一六年点	一六（反切三例）	一〇七	二八三	四〇六
④一二二三年点	六（反切三例）	二一四	二四六	四六六

やはり、加点の新しい④は、③に比して、仮名音注が多く、声点が少ない。

さらに、用例数を加えるために、巻第三において、同様の比較を行なうと、次の通りである。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
③一一一六年点	〇	二八	九一	一一九
④一二二三年点	四（全例反切）	一七二	二	一七八

この巻第三は、④点における声点加点が二例にとどまる。続く、巻第四・第五も同様である。これは、声点の必要性が薄れてきたことの反映であろう[9]か。

六、比較結果の確認

1．他の訓点との比較

a．興福寺本と他の院政期点との比較

興福寺本と京都大学人文科学研究所本との比較の結果、加点年代が降る京都大学人文科学研究所本に声点が少ないことが知られた。これを時代差と解釈して良いものか否か、両本による比較のみでは、わからない。よって、他本の実態を見てみる。

『大慈恩寺三蔵法師伝』現存本のうち最古の写本である興福寺本に続くものとして、法隆寺本が知られている。法隆寺僧覚印により、一一二六年に書写加点されたものである。巻一・巻七・巻九は、法隆寺に、巻三は国会図書館に、現在所蔵されている[10]。

この中、巻第三の国会図書館蔵本は、原本閲覧ができた[11]。

そこで、巻第三において、③点・④点と法隆寺本との比較を行なうと、次の通りである。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
③一一一六年点	〇	二八	九一	一一九
一一二六年点	二三（反切一六例）	三五	一〇六	一六四
④一二二三年点	四（全例反切）	一七二	二	一七八

法隆寺本一一二六年点の実態は、③一一一六年点に近く、④一二二三年点とは異なる[12]。

よって、本稿において、興福寺本をもって、平安末期・院政期加点本を代表させたことは、間違いではないであろう[13]。

b．京都大学人文科学研究所本と他の鎌倉期点との比較

『大慈恩寺三蔵法師伝』の鎌倉時代の訓点本は、本稿で取り上げた京都大学人文科学研究所本以外、管見に入らない。そこで、京都大学人文科学研究所本の一二一〇年朱点の状態を調べる。一二一〇年朱点（巻第六～巻第十）の字音注の数を、これまでと同じく数えると、次のようである。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
一二一〇年点	一九（反切五例）	二四五	五八三（68.8％）	八四七

右のとおり、これまで記してきた一二二三年墨点よりも、声点加点の割合が高い。

朱点の字音注総数八四七と同数となるまでの注を、一二二三年墨点の巻頭から順次抜き出す[14]。すると、巻一の三五二行目「綸（リム）（平）」までで、総計八四七に達し、その内訳は、左となる。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
一二二三年点	八（反切四例）	三八九	四五〇（53.1％）	八四七

これと比べ、朱点の声点加点率が高いのは、朱点に濁声点が多いためである。朱声点五八三例中、濁声点は二八〇例にのぼる。墨点では、四五〇例中、濁声点は三例しか無い。しかも、朱点では、濁声点のみ加点し、他の音注が存しない例が、二八〇例中、二六九例にも及ぶ[15]。

このように、唯一比較できる鎌倉期の朱点は、加点の内容が異なる。よって、一二二三年墨点をもって『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉期訓読を代表させることの当否は、不明である。しかし、一二二三年墨点では、声点加点が極端に少ない巻第三～第五を除けば、声点加点数は全体の音注の半数を少々超える程度で、安定していた。一二二三年加点の一資料として、信頼して良いであろう。

2．興福寺本における異種点の比較

これまで、興福寺本各種点と京都大学人文科学研究所本墨点とを、それぞれ比較してきた。

その興福寺本各種点も、それぞれ二十年程度の開きがある。ここでは、それらの訓点同士を比較してみよう[16]。

	反切・同音字注	仮名音注	声点	計
①点	八（反切無し）	二七四	八三九（79.7％）	一一二一
②点	二七（反切無し）	二九二	一四八三（82.3％）	一八〇二
③点	三二（反切四例）	三七〇	八三四（67.5％）	一二三六

①一〇八〇年頃点・②一〇九九年点は、音注全体に占める声点加点数の比率は、大きく異ならない。しかし、③一一一六年点では、声点加点の割合が、やや低くなる。これを、前節の検討結果に照らすに、加点の新しい③点において、声点の必要性が薄れたことの反映と解することができる。

七、声点が示す声調の分析

これまで、声点の減少は、『大慈恩寺三蔵法師伝』の訓読において、声調を正確に伝えることの意味が無くなったことの反映であると考えてきた。逆に、伝承声調が浸透し、声点を加点するまでもなくなったと考えなかったのは、本稿対象資料の声点を『廣韻』声調・声母と対応させたことがあったからである。[17]

その結果、同時期の漢籍訓点資料よりも、日本漢音の六声体系と中国中古音との対応の原則から外れる例が多いことが知られた。その原因として、呉音声調が相当数混入しているであろうこと、[18]漢音の国語化と考えられるものも存するであろうことを述べた。

ここで、その具体例の若干を挙げたい。

1．軽声点の加点数

日本漢音の声調で一般的なものは、四声に加えて平声・入声に軽声を持つ六声体系である。

そして、この軽声は、時代とともに減少することが知られている。[19]

①点と④点とを比較すると、①点の軽声が④点で重声になる、次のような例が見られる。

a・①点「平声軽」―④点「平声」

①英(平軽)聖(去)(一6)―④英(平)聖(去)(一7)

①先(平軽)昆(平)(一13)―④先(平)昆(平)(一12)

①殊(平軽)途(平)(一22)―④殊(平)途(去)(一20)

以下、三十一例。

これに対し、①点の平声軽加点箇所に④点でも平声軽が加点された例は、十二例である。

b・①点「入声軽」―④点「入声」

①桀(入軽)跖(入)(一85)―④桀(入)跖(入)(一82)

①博(入軽)帯(一159)―④博(入)帯(去)(一156)

①郭(入軽)有(上)道(去)(一160)―④郭(入)有(上)道(去)(一157)

以下、九例。

これに対し、①点の入声軽加点箇所に④点でも入声軽が加点された例は、五例である。

右のa b諸例は、漢音声調の国語化現象である、軽声の減少が表れた例と解せる。

2．その他の声点の異同

①点と④点とで同一箇所に声点加点が存する例を比較すると、右以外にも異なるものがある。①点「去声」―④点「去声以外」の例が最も多い。その例を次に掲げる。また、当該字の中国中古音声調を〈 〉に入れて、用例下に記す。

a・①点「去声」―④点「去声以外」

（〈 〉内は、当該字の中国中古音声調）

1 盛(去)烈(入軽)(一131)―盛(平)烈(入軽)(一129)　〈去声〉
2 鐘(平)漏(去)(一147)―鐘(平)漏(平)(一144)　〈去声〉
3 哀(平軽)慟(去)(一148)―哀(平)慟(平)(一145)　〈去声〉
4 仲(去)弓(平軽)(一156)―仲(平)弓(平)(一153)　〈去声〉
5 諱(去)(一156)―諱(上)(一153)　〈去声〉
6 太(去)守(去)(一157)―太(去)守(上)(一154)　〈去声〉
7 百(入軽)戯(去)(一169)―百(入)戯(平)(一166)　〈去声〉
8 比(上)預(去)(一175)―比(上)預(平)(一172)　〈去声〉
9 朗(上)俊(去)(一105)―朗(上)俊(平軽)(一102)　〈去声〉
10 懿(去)業(入軽)(一112)―懿(平)業(入)(一109)　〈去声〉
11 懿(去)親(平)(一119)―懿(平)親(平)(一115)　〈去声〉
12 縄(去)墨(入軽)(一114)―縄(平)墨(入軽)(一114)　〈平声〉
13 宗(去)途(平)(一136)―宗(平)途(去)(一131)　〈平声〉
14 削(入軽)藁(去)(一146)―削(入)藁(平)(一143)　〈上声〉

中国中古音の声調は、多くの場合、①点の声点が示すものに一致する。したがって、すでに指摘されているとおり、呉音声調が混入しており、その例が④点に多いものかも知れない。たとえば、1の「盛」は、『法華経音訓』で平声・去声両点字である。

しかし、呉音資料に見られる声調にも合致しない例もある。

5「諱」は、呉音資料中に当該字への声点加点例を未だ見出せない。しかし、当該字の『廣韻』反切下字であり、①点の音注字でもある「貴」は、観智院本『類聚名義抄』和音で平声である。よって、「諱」も呉音平声であった可能性が高い。にもかかわらず、④点は、上声を加点する。この「諱」の場合は、一音節去声字の上声化例であると思われる。

また、6「守」の④点は、連音上の声調変化（中低型アクセントを避けるため、本来の去声が上声となった）を示すとも考えられる。

したがって、右のような、①点と④点との相違が生ずる原因は、

様々なのであろう。

ただし、より加点の古い①点が日本漢音声調に正確であり、④点は何らかの理由によって、それが変化してしまったものと解される。これも、漢音声調の国語化現象として把握できる。

b・右以外の声点の異同

右の「①点去声―④点去声以外」とは別の対応でも、同様の指摘ができる。挙例は省略する。

さらに、②点と④点、③点と④点との間でも、類似の例を加えることができる。

いま、比較的加点例の多い漢字の中から、「御」を例に挙げる。

「御」は、興福寺本①点では、「キヨ」の仮名と去声点とが加点されている。②C種点でも、去声点加点例が十例である。しかし、C種点では、「奉御」の語中に、上声点加点例が二例存する[20]（去声点加点例十例の内にも、「奉御」の例が二例ある）。

④点では、去声一例（「御（去）ヲ」七119）・上声一例（「奉（去）御（上）」八90）である。用例が少ないが、「奉御」で、上声となるのは、C種点と同じである。

京都大学人文科学研究所本一二一〇年朱点には、「御」に去声または上声点を加点した例が、五例ひろわれる[21]。実例は、次の通りである（ただし、（墨去）は、③一二一三年墨点。以下同様）。

〈去声点加点例〉

奉（去）御（去濁）（八7）

〈上声点加点例〉

奉（墨去）御（上濁）（八119・185）　奉―御（キヨ）（上濁）（八87）

奉―御（上濁）（九119。合符は墨。）

右のごとく、すべて「奉御」の例である。去声点一例・上声点四例となり、上声点が多い。これは、去声（上昇調）＋去声（上昇調）により生じる中低型アクセントを避けた声調変化が進んだものと解釈できる。

なお、一二一〇年朱点で、声調変化と解釈できる例として、「馬」の場合を加える。

〈去声点加点例〉

紺（墨平）（コン）馬（ハ）（去濁）（九226。仮名は墨、左傍。）

〈上声点加点例〉

走（墨去）馬（上濁）（九220）　班（墨平）（ハン）馬（ハ）（上濁）（六60。仮名は墨。）

曹（墨平軽）馬（上濁）（九414）

さらに類例を掲げることは、省略に従う。

右は、国語のアクセントとは別に、独自の声調を保ってきた漢音声調の国語化現象である。したがって、今回の比較の結果知られた声点の減少は、約一五〇年間に、『大慈恩寺三蔵法師伝』の訓読において、声調を正確に伝えることの意義が薄れたことを反映するものと考えられる。

八、むすび

本稿では、院政・鎌倉時代において、漢音声調の必要性が低くなる様を見ることを目的とした。その指標として、声点加点数を見てきた。

同時代の異種訓点資料（字音直読資料・漢籍訓読資料・仏書訓読資料）の漢字音を比較しただけでは、声点加点密度の相違には気づきにくい。しかし、時代を隔てた同資料における声点を比較することによって、両者の相違が知られた。

院政期と鎌倉期との資料を比べると、声点加点数が減少していた。これと、声点が示す声調の分析とから、漢音声調が国語化された結果、本来の漢音声調を示す必要性が低下したものと考えられた。

時代が降るとともに、漢音声調の必要性が薄れることは、どの文献でも変わらないであろう。しかし、同時代においても、伝統的な漢音声調を伝えるかどうかは、文献により差があり、それが声点の加点密度に反映されたと考えられる。本稿の対象とした『大慈恩寺三蔵法師伝』では声点が減少していた鎌倉時代においても、『蒙求』『佛母大孔雀明王経』のような字音直読資料では、原則として全漢字に声点が加点されているからである。

また、伝統的な漢音声調は、国語化を蒙り、さまざまな形で実現されていたことをも見た。中国語原音に近く発音するかどうかが、場合によって異なっていたと言うこともできる。

本稿では、『大慈恩寺三蔵法師伝』の訓点資料を取り上げたに過ぎない。別の資料における検討を重ねなければならない。

〈注〉

（1）一方、呉音声調は、資料の不足により、初期の状態が不明である。

（2）佐々木勇「『蒙求』における日本漢音声調の伝承と衰退」（『訓点語と訓点資料』第九十九輯、一九九七年三月）、参照。

（3）佐々木勇「清原宣賢の漢音声調――十六世紀前半の実態把握のために――」（『国文学攷』第一五四号、一九九七年六月）。

（4）興福寺本は、最古の写本であり、築島裕『興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』（訳文篇・一九六五年、索引篇・一九六六年、研究篇・一九六七年、東京大学出版会）で、資料が整備されていることにより選ぶ。調査は、築島裕著書に依る。また、京都大学人文科学研究所蔵本は、鎌倉時代唯一の訓点本で、全巻完存していることから、取り上げる。原本調査に依る。

（5）築島裕『興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』訳文篇・

研究篇に依る。

(6) 月本雅幸「大唐西域記の古訓法について」(『国語と国文学』第五七巻十二号、一九八〇年十二月)参照。

(7) 当該字に同音字注・仮名と声点とが加点されていれば、それぞれ一と数える。声点が二つ加点されていれば、二と数える。陀羅尼は、除外した。「火イ」は、同音字と仮名との両方に数えた。以下、同じ。

(8) これは、②点には声点のみを加点した例が多く、④点にそれが少ないことを反映している。

(9) 当時、声点加点の必要性が低くなっており、巻が進むにしたがって、省略が多くなったのではないかと考える。ただし、巻第六～巻第十までには、また、声点が比較的多く加点されている。巻六～巻十の本文には、詔勅や玄奘三蔵の表啓などが含まれ、それを声調も正確に読もうとしたものであろうか。また、京都大学人文科学研究所本の巻第六から巻第十には、先に述べたように、一二一〇年加点の朱点が存する。朱点が、後半巻六～巻十巻にのみ存するのも、このことと関係するのかも知れない。

(10) 京都国立博物館蔵巻第六も、この僚巻かとされる(文化庁監修『国宝・重要文化財大全　7書跡　上巻』(一九九八年七月))。ただし、巻第六は、無点である。その他の巻は、現所在不明である。

(11) 以下は、原本調査に依る。なお、築島裕「上野図書館蔵大慈恩寺三蔵法師伝巻第三古点」(『東京大学教養学部　人文科学科紀要』第十六輯　国文学・漢文学Ⅴ(一九五八年十一月))として、影印・解読文・主要語彙索引が公刊されている。

(12) 法隆寺本では、反切・同音字注の数が比較的多いことが注目される。法隆寺本の祖点が、三本の訓点を移点し合わせたものであった(巻一奥書による)ためであろうか。

(13) 宇都宮啓吾「興聖寺一切経における訓点資料について――その素性を巡って――」(『鎌倉時代語研究』第二三輯、二〇〇〇年一〇月)によれば、興聖寺に一一三二年書写同時期加点『大慈恩寺三蔵法師伝』十巻が蔵されている。この訓点は、興福寺本に近いものだという。

(14) 巻第六～巻第十までに加点された一二一三年墨点と朱点とを比較することが考えられる。しかし、この両点は、同一本の同一本文に加点されている。一二一〇年に朱点が加点され、なお空白であるところに、一二一三年に墨点を加点した。よって、墨点加点に朱点の影響が存した可能性があるため、同一本文における両点の比較は、避ける。

(15) これらの例は、濁音を示すことに主目的があり、声調はそれに付随して示されているものと解釈できる。

(16) ①③は、全例である。②は、加点例が多いため、巻七に限る。

(17) 佐々木勇「十一～十三世紀における法相宗の漢音」(『鎌倉時代語研究』第十八輯、一九九五年八月)

(18) 築島裕は、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』で、同一漢字に多様な声点加点がなされている実態を掲げ、「呉音系声調の影響を受けたものでもあらうか」と疑っている(注4著書研究編二五六～二六〇頁)。また、沼本克明は、『大慈恩寺三蔵法師伝』興福寺本・法隆寺本の訓点に、呉音声調の混入があろうことを述べている(『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』一〇四二～一〇四四頁)。

(19) 柏谷嘉弘「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』第六一集、一九六五年六月)、注2佐々木論文、参照。

(20) ③点E種点には、「御」への加点例が無い。

(21) 他に、平声点加点例が三例存する。御(平)製(去)(八3)　御(平濁)製(墨去)(八289)　御(平濁)製(墨平)(九51)。「御製」の語では、平声であったらしい。興福寺本C点・D点でも、平声点が加点されている。

(ささきいさむ・広島大学助教授)